母親の被養育経験が遊び場面の母子行動と育児負担感に及ぼす影響

麓　彩乃

【序論】被養育体験は、他者との関係性の基盤となる内的作業モデルを形成し（Bowlby, 1969/2003)、その後の自らの子どもへの養育にも影響を及ぼす（数井ら, 2000)。本研究では、1歳半前後の児とその母親を対象に質問紙調査と行動観察を行い、母親の被養育経験が、母親の育児負担感、遊び場面での母親の言動・話しかけ方、そして児の行動にどのような影響を及ぼすかを検討した。

【方法】分析対象はA保健センターの1歳半検診に訪れた母親と児（平均月齢19.90ヶ月）30組であった。母親には日本版 Parenting Stress Index Short Form（日本版 PSI-SF)、家族機能尺度（FACESⅢ）邦訳修正版に回答してもらった。母子遊びでは、積み木10個を組み立てる児と、児が教示通りに組み立てられるよう援助する母親の行動を5分間撮影した。そして、遊び場面での母親と児の行動の生起回数や、母親の声の周波数が被育児経験と関連しているかを分析した。

【結果と考察】FACESⅢの得点を基に、母親を極端群、中間群、バランス群の3群に分け、育児ストレス4項目の各平均点に差があるかを検討したが、いずれにも差は見られなかった。つまり、家族機能度は育児負担感に影響しないことが示された。次に、同じ3群について、5分間の遊び場面での母親の「共感」の生起回数を比較すると、他群よりバランス群での生起が有意に多かった。これは家族との情緒的な繋がりが共感性を育むという先行研究（山口, 2006）の知見を支持する結果であった。さらに、同じ3群について、5分間の遊び場面での母親の声の周波数を比較した結果、最高周波数の平均においてバランス群が中間群より高いという有意傾向が見られた。また、凝集性得点と“最高周波数－最低周波数”の間に弱い正の相関が見られた。以上のことから、バランス群の母親は他群の母親より高いピッチで児に話しかけ、また家族の凝集性が高い母親ほど話しかけの周波数に高低差が見られることが分かった。高いピッチはIDS（Infant-Directed Speech）の特徴であるため、バランス群に属する母親および家族の凝集性が高い母親はIDSを用いる傾向が強いと言える。次に、同じ3群について5分間の遊び場面での児の行動の生起回数を比較した結果、凝集性得点と、母親の指示に対する児の拒否的な行動や自己主張を表す「拒否」のカテゴリーに弱い正の相関が見られた。凝集性得点が高い場合、家族同士の繋がりが非常に強く、普段から自身の意思や時間より家族を優先することが多いと考えられるため、凝集性得点が高い母親ほど自分を変化させ相手に合わせて受容的になる可能性がある。また先行研究（藤原ら, 2009）は、受容的な養育態度の養育者をもつ児は強い自己主張が見られると報告している。本研究の結果は、先行研究を支持していると言える。本研究から、母親の被養育体験は、現在の育児だけでなく、児の行動にも影響を及ぼす可能性が示された。（比較発達心理学）